「東日本大震災」緊急消防援助隊　第１次派遣隊が視たもの

【所　属】　　消防本部警防部

【階　級】　　消防司令長

【名　前】　　窪田　浩

平成 23 年 3 月 11 日　19 時 50 分、東北地方太平洋沖地震発生から 5 時間後、私たちは想像を絶する見たことのない世界へ向け出発した。

緊急消防援助隊　大阪府隊　第 1 次派遣隊は、万博公園を後に一路関東方面へ進出を開始した。目的地の決まらないままの出発である。そこにあるのは、「被災地」という言葉だけ。赤色灯の明りが暗闇に繋がり、長くそして大きくうねりながら動き始めた。

13 日深夜 2 時 40 分、出発から 30 時間後、進出拠点である岩手県遠野市「遠野運動公園」に到着、野営地を設営した。3 月の遠野は寒さが厳しく、沿道には溶けずに残った積雪が白く氷の板のように張り付いていた。

深夜の凍結したグランドで、車両・資器材の点検が始まる。隊員たちの疲労はすでに限界を超えているはず。士気の高さとまだ見ぬ被災地に対する想いが、隊員達を軽い躁状態に誘い、救援準備は着々と整う。

4 時 00 分 部隊長ミーティングにて本日の活動方針決定、各隊に示達する。

5 時 00 分 起床、食事

5 時 30 分 先遣隊（指揮隊・救急部隊長・救助部隊長）釜石市経由にて大槌町へ向け出発。

6 時 30 分 救助部隊・救急部隊出発

7 時 30 分 消火部隊出発。いよいよ救援活動開始である。

大阪府隊の活動は、地震発生後未だ救助の手が入っていない場所、情報もなく被害の様相がまったくつかめない「大槌町」。はたして被害の程度はどれくらいなのか、一抹の不安を抱きながら先遣隊として現地をめざす。大槌までの道路は津波により壊滅的に寸断されており、やむなく約 10 キロ手前から先遣活動のため釜石市内から乗換えてきたマイクロバスを乗り捨て、各自資器材を携行しヘドロと瓦礫の中徒歩で大槌町をめざす。目に映るものはすべて破壊され、破壊された空間をひたすら歩く。

山を越え、真っ暗なトンネルを抜け、煙に霞む明りの先には、そこに在るべきものがなく、存在してはいけないものが眼の前いっぱいに広がっていた。全身を駆け巡る血液が沸騰するがごとく鼓動が高鳴り、その半面襟元から背中に雪が入り、冷たい指先でなぞられた様な感じがした。「なんやこりゃ、何から手をつけたらええんや！」声にならな

い叫びが頭の中で繰り返された。
　吹き溜まりには、瓦礫の層が幾重にも重なり、自動車は飴細工のように変形し電柱にぶら下がる。漁船は道路に横たわり、マンションは骸骨のような骨組みで上層部を支えていた。「なんと不自然な光景なんや」津波の強大なパワーに恐れおののいた。
　この災害はかつてない規模とかつてない範囲におよび、被害も過去に類のないものであった。阪神淡路大震災にも救援にかけつけたが、それとは異なる様相を呈していた。決定的に違ったのは、そこに在るべきものがなく、そこに存在してはいけないものがある。それも木っ端微塵に砕かれた街の姿であった。
　被災状況のマップ作りから着手せざるをえなかった。現地調達した航空地図を切り離した。それぞれが切り離されたページを手に砕かれた街の姿を地図に落とし込んでいった。
　手探りの救援活動、手の届くところからしかできない救援活動、幾重にも重なる拭いきれないヘドロと瓦礫の山。余震、津波警報、そして津波が運んだ海泥とヘドロの表層が乾き、細かい砂塵を舞い上げ砂嵐を起こす、思うように活動ができない。与えられた限りある時間との戦い「一人でも多く、助かる命を助けたい」と焦る想い。そんな救助する側の焦燥感と無力感を癒してくれる、被災された方々。救援物資が届かない現状にありながら、自らのおにぎりや水を分け与えてくれ「大阪からなぁ！　助けに来てくれて、ありがとうなぁ」と声をかけていただく。悲しみが深すぎるのか、叫ぶことすらせず、笑顔すら見せる彼らだが、避難する道すがら家族と再会し抱き合い流す涙。同行の大槌町消防職員は家族の安否確認すら出来ぬまま、昼夜私たちと活動をともにした。彼らも被災者のはず、この災害の深い悲しみを視た。
　この災害の教訓は活かせるのか、今後私たちが立ち向かう災害に活かせるのか、教訓とするにはあまりにも重すぎる出来事、答えは闇の中にある。計り知れないパワーに対する恐怖心、拭いきれない無力感、私たちが自然災害に対する意識を変え、おごりを捨てない限り、とうてい太刀打ち出来ないほど自然の力は強大であった。
　この想定をはるかに越え、甚大な被害を与えた災害を今後に活かすには、私たち一人ひとりが「今何が求められているのか、今何ができるのか、今何をすべきなのか」を心底考え、この職をめざした熱い想いを今一度たぎらせ、この瞬間にもかつてない想定を超える災害に立ち向かわなければならないことを深く自覚しなければならない。それが被災地大槌町から帰庁した私たち第１次派遣隊が深く心に刻んできたもの、それが被災地大槌町のみなさんの笑顔とともに、泥と埃にまみれた手から直接私たちへ託された使命。

　今なお支援の手が届かない被災地も多い・・・復興には長い時間が必要であろう。被災地の人々を忘れず、見守り、直接的、間接的に長期的に復興支援のエールを送り続けたい。
　そして、被災された方々に、心からの笑顔が戻るよう、一日も早く心安らげるよう、真の復興を心から祈る。